

# 奈良国立大学機構 連携教育開発センター活動報告

— 2022・2023 年度の取組と課題 —

【三菱みらい育成財団の助成を受けて】

森安寛

(奈良国立大学機構連携教育開発センター)

Activity report of Center for Interprofessional Education Development

— Endeavor and Problem of 2022・2023 —

【With the grant from Mitsubishi Future Development Foundation】

Hiroshi MORIYASU

(Center for Interprofessional Education Development, Nara National Institute of Higher Education and Research)

**要旨：**奈良国立大学機構（奈良教育大学・奈良女子大学）では両大学の教育連携を図る目的で「喚起」「融合」「交歓」を鍵とする3つの取組『奈良カレッジズ学問祭、連携開設教養科目の共同履修、総合知育成コンクール“H<sub>2</sub>O”』による分野横断的課題や「正解のない課題」に対応できる人材育成を展開している。ここでは連携教育開発センター設置の経緯やチーム構成に触れた上で、三菱みらい育成財団助成 2023 年度「21 世紀型教養教育プログラム」に採択された事業の諸取組を報告し、今後の課題について述べる。

## 1. はじめに

1888 年に創設された奈良県尋常師範学校を前身とする奈良教育大学（以下、教育大と記載）と、1908 年に創設された奈良女子高等師範学校を前身とする奈良女子大学（以下、女子大と記載）がともに 2004 年に法人化され、その後 2022 年 4 月に両大学組織を残したまま法人統合され、国立大学法人奈良国立大学機構（以下、機構と記載）が誕生した。奈良の地にある小規模総合大学としての強みを生かし、榊裕之理事長の下、機構が掲げるモットー“大学を結う、紡ぐ知と未来”に即して、教育・研究が進められている。

法人の統合にあたり、特に教育面において新たに設けられたのが、連携教育開発センターである。これは、両大学における教養教育・教員養成教育・ICT を含む情報教育、附属学校における教育、及び現職教員研修のそれぞれに関わる事業や研究開発を先導し、高等教育の改革のみならず、教育全体の改革に寄与することを目的とした組織であり、課題解決型の5つのプロジェクトチーム（教養教育・教員養成・情報教育・附属学校・教員研修の各チーム）が設置されている。

さらに、機構が掲げる3つのミッションのうち、「文理統合的知性の涵養と高度な専門教育により、総合知を持つ人材を育成し、特色ある高度な学術研究を推進」という取組にもセンターは着手している。すなわち、「喚起・融合・交歓により「総合知を構築する力」を育み、

磨き合う学修システム—『奈良カレッジズ学問祭』を核とする3つの取組—というプロジェクトである。これは、「多様な考え方を繋ぎ、統合・融合し、新たな知や価値を創出する力」（＝「総合知を構築する力」）を、対話を通して楽しみながら育み、磨き合う学修システムを開発・実施することを目指すものである。このプロジェクトは、一般財団法人三菱みらい育成財団の助成対象として 2023 年度「21 世紀型教養教育プログラム」に採択されたため、本センターにおける従前の諸取組と有機的に結びつける形で 2023 年 7 月より推進しており、以下がその報告である。

## 2. 学問祭と関連行事

### 2.1. 『奈良カレッジズ学問祭』「諸学への誘い」

さまざまな学問に触れ、知る欲びや考える愉しみを体感すること、そして、個別の学びから得た多様な知識を繋ぎ、統合・融合させ、独自で幅広い考えや新しい価値を生み出し、他者に対して表現できる力を涵養することを目指して、法人統合初年度から実施しているのが『奈良カレッジズ学問祭』である。

2022 年度は 8 月 25 日から 31 日までの期間、両大学の教員 10 名、機構の榊裕之理事長に加え、奈良カレッジズ構想における中核機関から奈良国立博物館井上洋一館長、奈良文化財研究所本中眞所長、奈良先端科学技術大学院大学塩崎一裕学長が講演を行った。両大学の学生

は、興味のある講義を所定のコマ数、自由に選んで受講することにより、教養科目「諸学への誘い」の単位を取得することができる。受講者は両大学の学部生のみならず、両大学の大学院生、附属学校の生徒や教職員も聴講し、現代アート、ブラックホール、奈良の伝統相撲、文化財、博物館、世界遺産、酵母、書道などの多様な分野の研究、研究者としての経験を聴き、学問の面白さや奥深さを感じるこのできる一週間となった。

受講人数（オンラインを含む）は、両大学併せて延べ2,199名に上った。さらに、最終日には、スピノフ企画として「学問サロン〜テーブルを囲んでガクモン対話〜」を開催し、学問祭に登壇した講師の推薦図書を企画展示した会場で、研究者と学生とが学問の楽しさ・魅力を語り合った。



図1 学問祭開講案内

2023年度には8月24日～30日までの一週間、両大学の教員9名に加え、奈良国立博物館吉澤悟氏、奈良文化財研究所神野恵氏、ロンドン芸術大学ジュリア・カセム客員教授、株式会社国際電気通信基礎技術研究所川人光男氏、奈良工業高等専門学校後藤景子前校長、奈良県教育委員会小崎誠二氏が講師陣として名を連ね、正倉院宝物、考古学、インクルーシブデザイン、心理学、ESD、遺伝子学など多様な研究内容および、研究者としての経験についての講義を行い、「その分野の研究に進むきっかけは？」など活発な質疑応答がなされた。

両大学併せて延べ2,045名が受講したが、講義会場には各講師の推薦図書の展示が行われ、1937年発行の巨大図録など珍しい本を実際に手にとる学生が多くいた。参加した学生からは、「普段の学びとは違う分野については、難しいものもあったが、これから研究を進めていくにあたって、新しい視点のきっかけになった。」などの声が聞かれ、講義を実施した教員からも、「自らの研究人生について改めて見直す機会となった。」「自身の研究内容への思いを再確認できた。」といった感想があり、学生・教員とも自主的に学問を楽しんでいる様子が垣間見えた。

また、この2023年度には、学生や教職員と一緒に学問祭での各講義内容に関するレポートを読みあい、そこから展望できる新しい「知」について意見交換をする「レポート合評セッション」が実施された。（詳細は後述）

## 2.2. スピノフDAY「インキュベーションー異分野とのコラボのためのABCー」

2023年8月30日、『奈良カレッジズ学問祭』の一環として、機構アドバイザーボードメンバーであるジュリア・カセム先生を招いて上記の企画が開催された。

コラボレーションのためのABCとして、革新的なソリューションと古い課題に対して、どのような新しいシナリオをデザインできるかについて、また、チーム・スキルの考え方について講師から説明があった後、グループに分かれ、参加者それぞれが持ち寄った自分にとって重要な物理的ツールを使って、2分間の自己紹介が行われた。

その後、各グループに対し「新たなウェアラブル端末の開発」「新しいレジャー」「新しいお風呂グッズ」「空き家を利用した新たなコミュニティ施設」「新しいタイプの健康的な軽食」というテーマが与えられ、各グループメンバーの強みを活かした商品開発についてグループディスカッションがなされ、最後にビジュアライザーが描き起こしたイラストを用いた発表が行われた。

両大学の学部生のみならず大学院生、留学生、大学教員、企業家など、多様な背景をもつメンバーが参加し、商品開発に必要なスキルと、チームが持っているスキルを組み合わせ、また、自分と相手の価値観の組み合わせにより、異分野とコラボしながら、新たなものを作り出すプロセスを体感できる取組となった。

## 2.3. 学問祭推薦図書展

学問祭の講師が学生達に推薦する図書を展示紹介する企画であり、2022年度には29冊、2023年度には28冊の推薦図書が紹介された。各講師が長年研究してきた内容を学生たちに理解してもらうことを目的とした図書や、専門外ではあるが学生達の総合知構築力を高めるために良かれと思われる内容の図書である。実際の図書は、教育大構内に2023年9月にオープンした「総合知ギャラリー」にて「学問祭2023推薦図書展」（会期：9月4日～10月13日）として展示された。さらにその後、機構本部内（女子大キャンパス隣接）に2023年4月にオープンした「奈良カレッジズ交流テラス」で巡回展示した。（会期：10月16日～10月31日）。

研究の最前線にいる各推薦者から選び抜かれた優れた書籍の数々を直に手にとり楽しみながら総合知を育む時間とすることができた。



図2 学問祭推薦図書展

## 2.4. 学問祭課題レポート合評セッション

今年度初めて行われた企画である。学問祭で受講した2つ以上の講義を選び、それらを自分なりに俯瞰し、関連づけたり融合させたりすると見えてくるものについて自由に論じた提出レポートのうち、自薦・他薦でエントリーされたレポート（17本）を学生や教員が集まって批評し合うセッションで、9月26日に奈良カレッジズ交流テラスで開催された。

まず、エントリーされたレポートの黙読タイムが設けられ、レポートの観点や融合の視点を理解した上でグループに分かれて活発な意見交換が行われた。

最後に参加者全員による投票が行われ、「新しい方法論を拓くで賞」「独創的で賞」「社会が注目するで賞」の3つの賞にふさわしいレポートが選出され、執筆者に賞状と副賞が授与された。参加した学生からは「同じ授業を受けていても人によって感じていることが全く違うことがわかっておもしろい。」「大学のレポートは出して終わりだが、他人が書いたレポートを読み込んでみんなで深めて話し合うことが初めてだったので勉強になった。」「学問祭には参加していなかったが、自分の悩みや引っかかっていることに関して、今日のレポートからヒントを得ることができた。」「属性や世代が違うにもかかわらず、なにか響き合ったり繋がったりすることがあって良い刺激をもらった。」等の感想が聞かれた。この企画は後述する三菱みらい育成財団からの助成によるイベント

の一つとして、「総合知を構築する力」を養う取組にもなっており、まさに対話を通して新たな考えを生み出すためのよい刺激にあふれた機会となった。



図3 合評セッションの様子

各受賞作品は次のとおりである。

●新しい方法論を拓くで賞

山本 花菜 (奈良教育大学教育学部 3 回生)

タイトル: 学際的研究のススメ

～文化を絶滅から救え!～

●独創的で賞

山本 隆萬 (奈良教育大学教育学部 1 回生)

タイトル: 学術研究における『洞察的直感力』の重要性

●社会が注目するで賞

前沢 千咲貴 (奈良女子大学工学部 2 回生)

タイトル: 認知の歪みの改善方法

## 2.5. 学問祭レポート合評セッション展

前述の合評セッションにエントリーされた17本のレポートの中から、執筆者の承諾を得られた12本のレポートを広く両大学の学生に周知することを目的に総合知ギャラリー(会期:10月20日～11月16日)および奈良カレッジ交流テラス(会期:11月20日～12月4日)にてレポート展が開催された。開催に先立ち両大学の教務・学務課から全学生や教員に向けた広報メールが幾度も発出され、特にギャラリーでの展示では学問祭でのどの講義とどの講義が融合されたものであるかを視

覚的に把握できるような展示の工夫がなされた。

また、女子大においては交流テラス入り口直ぐに各レポートの展示コーナーが開設され、訪れる人が展示を目的の当たりにできる展示工夫がなされ多くの学生のみならず教員も見学に来る盛況ぶりであった。



図4 総合知ギャラリーでのレポート展示

## 3. 連携開設科目

### 3.1. 趣旨

機構の第4期中期目標においては、学士課程の教育にかかわるものとして「特定の専門分野を通じて課題を設定して探求するという基本的な思考の枠組みを身に付けさせるとともに、視野を広げるために他分野の知見にも触れることで、幅広い教養も身に付けた人材を育成する」という一項目が掲げられている。これに対応する中期計画のひとつとして、「学士課程学生の視野を広げるため、両大学の学生が相互に教養科目を履修できる体制を築く」という取組項目が設定されており(項目2-1の一部)、これを推進すべく、両大学の学生が相手大学の教養科目の一部を履修することを可能にした枠組みが連携開設科目である。

### 3.2. 連携開設された科目

2022年度においては教育大開設科目(前期2科目、後期4科目)および女子大開設科目(前期4科目、後期8科目)を、2023年度においては教育大開設科目(前期8科目、後期6科目)および女子大開設科目(前期4科目、後期8科目)を両大学の教養科目のうちから連携開設科目として指定し、両大学学生が共同履修することを可能にした。具体的には下表のとおりである。

### 3.3. 意義

教養科目の一部を相互に共同履修できるというこの新制度を評価する理由として、教育大の学生の側からは、「ジェンダーに関する授業を取ることが出来たから。」「多様な学問に触れられたから。」「受けられる科目が増えるから。」「教育大には無い専門の話聞いた。」などの声があり、女子大の側からは、「学びの幅が広がるから。」「選

択肢が増えるから。」「興味があり、面白かったから。」「世界的なジェンダーの問題や論点について医学的な観点から学ぶ事ができた。」などの声が聞かれた（2022年度実施のアンケートより）。

受講できる科目の選択肢の増加は、学生一人ひとりの知的・学問的な視野の拡大に直結するものである。〈総合知を構築する力〉を育む素地としても、この連携開設科目制度は大きな意義があるといえよう。

表1 連携開設科目一覧（2022・2023年度）

連携開設された教育大の教養科目
<p>■ 2022年度（計6科目）：【前期】フィールドワークで地域に学ぶ/コミュニケーションワークショップ、【後期】仮名書道と実用書/奈良と文学/Science Lesson in English/ 教師力ケースメソッド</p> <p>■ 2023年度（計14科目）：【前期】フィールドワークで地域に学ぶ/科学技術の歴史と身の回りの物質/コミュニケーションワークショップ/仮名書道と実用書/ESDと防災/考古学と自然科学/キャリア形成と人権/ESDと学校教育、【後期】フィールドワークで地域に学ぶ/ESDと生活科・総合的な学習の時間/人権と教育/奈良と文学/「日の丸・君が代問題」の歴史的考察/国連SDGs入門-「行動の10年」のためのサスティナビリティの学び-</p>
連携開設された女子大の教養科目
<p>■ 2022年度（計12科目）：【前期】政治学/ジェンダー生理学/生活と色彩/日本の言語と文学、【後期】生活の中の物理学/人体科学/西洋の美と芸術/国際関係論/ベトナムの言語と文化/数学入門/固体地球環境学入門/科学史</p> <p>■ 2023年度（計12科目）：【前期】法律学/ジェンダー生理学/生活と色彩/日本の言語と文学、【後期】生活の中の物理学/人体科学/西洋の美と芸術/環太平洋くろしお文化論/国際関係論/数学入門/固体地球環境学入門/科学史</p>

#### 4. 「総合知」育成コンクール“H2O”

総合知的な自由研究レポートやエッセイを提出しあい、互いに学び合う取組である。ここにいう「総合知」とは、各自の専門・教養の学びや日頃の生活の中での気づきを活かしつつ、本来は異なる分野・領域だと見なされがちなものを各自の視点で俯瞰したり繋げたりしたもののことである。さらに、異なる分野・領域とは文系×理系という概念に限らず、文系×文系、理系×理系、あるいはアート×理系など多彩なものを指すと、学生にアナウンスした。また、提出形式は授業のレポート、論文、エッセイ、制作物などコンクールの趣旨に合っていれば

自由とした。募集対象は両大学の学部生・大学院生のみならず両大学の附属学校（教育大附属中学校・女子大附属中等教育学校）生徒をも含めた。

募集は2024年1月5日に締め切られ、コンクールは1月11日に奈良カレッジズ交流テラスで開催された。当日は5つのエントリー作品が寄せられ、参加者でじっくり読み、眺め、意見交換しながら総合知を構築する力を深化させ、最後に魅力的・刺激的な作品を投票により選んで表彰を行った。

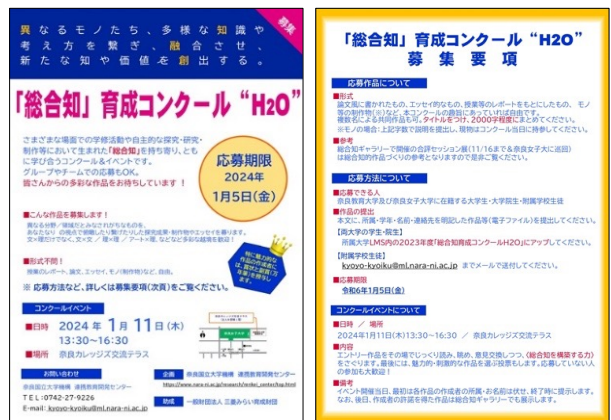


図5 育成コンクール案内と募集要項

各受賞作品は次のとおりである。

- 総合知育成コンクール・理事長賞  
東 瑞（奈良教育大学教育学部2回生）  
タイトル：歌・ことば・文化遺産を融合させた「詩吟」文化の継承
- 総合知“H2O”賞  
佐土島 音々（奈良教育大学教育学部3回生）  
タイトル：主体性を促す幼児教育と他分野への応用性

また、上記を含むエントリー作品は、広く両大学学生に披露するために、後日、作成者の許諾を得た上で総合知ギャラリーと交流テラスで展示する予定である。

#### 5. 問いコンペ

これは、学生による研究成果ではなく、総合知の創造を触発するような“問いかけ”を1行で表現したものをし合うという新規の取組である。ジャンルは不問とし、「その問いを解くには、異なる分野/領域を繋ぎ・融合させることが必要となりそうなものを歓迎」として募集した。上記の「総合知」育成コンクール“H2O”内の一部門として展開したところ、寄せられた11の問いをめぐって、談論風の活発な意見交換がなされた。学生・院生だけでなく、教員・職員も応募可能としたことで、垣根のない全学的な知的意見交換の場を構築することができた。

## 6. 三菱みらい育成財団からの助成

三菱みらい育成財団は、三菱グループ創業 150 周年にあたり、次世代人材の育成を目的に、2019 年 10 月に設立された。不確定でひとつの正解がない時代を生き抜き、未来を切り拓く人づくりをテーマに、次代を担う若者の育成を目指す教育活動への助成と、ネットワークづくりや情報発信を行い、その成果を広く社会に波及させるための活動を行っている。助成対象のカテゴリーは 5 つに別れ、機構はカテゴリー 4（大学・NPO 等で行う、「21 世紀型教養教育プログラム」の指定を受けた。21 世紀型教養教育とは、私たちを取り巻く様々な環境が激しく変化する中で、現在・将来の課題解決に必要な基礎的素養と解決策を導き出すための世界観・価値軸を身に付けるもので、その領域は人文科学領域を中心に社会科学、自然科学を含め、これらの知識を融合させ「正解のない問い」について自分で考えて、アウトプットするまでのプロセスまで含むものである。更に現代的な課題（AI と倫理、感染症対策、温暖化、エネルギー問題、ダイバーシティ・インクルージョン、サステナビリティ、SDGs の課題解決等）についても取り上げ、同様の手法で取り組むものも含む。

機構では上記の取組を“喚起・融合・交歓により「総合知を構築する力」を育み、磨き合う学修システム—『奈良カレッジズ学問祭』を核とする 3 つの取組”と名を打ち助成申請を行い、2023 年 7 月に採択された。8 月 28 日には育成財団の妹背常務理事が来校され、開催中の学問祭を見学後、宮下大学総括理事・教育大学長、小川連携教育開発センター副センター長・女子大教授との対談が持たれた。



図 6 対談の様子（於：奈良教育大学）

その中で常務理事から機構の取組に対し「21 世紀型教養教育」の理念に合致したプログラムであることはもちろん、計画がさまざまな観点から工夫され、具体性が非常に高いとの評価が示された。続いて学問祭を視察しての感想や企業としての立場から大学の学びに求めること、高校生への総合知の普及について、大学として社会に貢献できることなどの対談が進み、最後に常務理事より「カテゴリー 4 の目指す 21 世紀型教養教育を地で行っていたという取組だと感じています。両大学の取組を奈良国立大学機構として東ね、両大学の資源を活用し、かつ、先生方も学生も楽しいという自主性をもって、総合知育

成に取り組まれていますし、複数の取組のプロセスの中にも総合知が組み込まれていると思います。年度を重ねるごとにさらに発展的に取り組んでいただけるのではないかと期待しています。」と両大学へのエールをもらった。

## 7. 今後の課題

総合知構築力育成にかかる機構の取組は分野横断的課題や正解のない問いに対応できる人材を育成し、社会に輩出するという目的のもと進められているものの、学生たちの視点からすると総合知構築力がいかに社会に出たときに重要となってくるのか、そもそも総合知とは何なのかといった感があるのも否定できない。合評セッション展を見学に来た学生からは「総合知ギャラリーそのものの存在を知らなかった。」「サロン風に改良して学生と先生方との交流の場にしては？」といった声も聴かれた。教育大構内の総合知ギャラリーは開設して日が浅いということ、キャンパスの北西角にあり、そもそも学生の往来が少ないという立地の悪さが影響しているようにも思えるが、機構が企画・開催している著名人を招いての多くの講演会（自身の専門領域外の知を知る絶好のチャンス）においても参加する学生が少なく、教職員への動員がかかるのが現状である。また、合評セッションや「総合知」育成コンクール“H<sub>2</sub>O”に於いては度々一斉メールや ZOOM による説明会、広報ポスターの掲示などの広報を行ったが、学問祭ほどの参加者を集めることができなかった。参加した学生からは「参加への敷居が高い。」や「受信するメールが多く、つつい流してしまう。」との声が寄せられた。今後は広報の手段を見直す必要があると思われる。また、「総合知」構築力を身に付けることは非常に大切であるので、特に 3・4 回生には参加の意義や必要性がより強く感じられるようなプログラムにしてみてもどうかとの学生からの声もあった。

激変する社会の中で重要課題を認識しつつ、その解決に主体的に取り組むために広い分野における重要な基礎概念や事項を繋ぎ、統合・融合して新たな知や価値を創出していくことがこれからの企業人に求められる。これはこれからの教員にも求められるものである。これからの学校現場においては従前からの「受動的知識習得型」の学習ではなく、主体的・創造的・探求的な学習が求められ、教員はそれを指導していくことが求められるのである。また、学校現場においては教科指導だけでなく様々な関係機関との連携が必要となる場面が多々有り、各専門機関からの専門的意見を統合・融合して問題解決を図ることも求められる。言わば総合知の活用そのものである。

奈良県においては大学 3 回生時点での公立学校教員採用試験受験が導入されようとしているが、総合知構築力の育成は一朝一夕にはいかない。大学入学直後から総合知構築力育成を図るための広報や啓蒙を企画・開催し時間をかけて総合知構築力を育成していかなければならない。

